

シンポジウムを開催した。招聘したのは鶴見俊輔、溝口雄三、松本健一、菅孝行、孫歌、張寧、岡山麻子、薛毅、黒川創、それに私の計10名。問題意識の極めて濃密な議論を経て、シンポジウムは種々の課題を提起し、かつ一定の有効な問題提起をなし得たと私は確信している。以下、本論文では私の問題意識に沿って、シンポジウムが問題提起した内容を基に課題を展開したい。

[I]

知識人と内なる民衆性

社会の「無思想状況」は一見すると、日常を生きる民衆の「非政治性」あるいは「政治的無関心」と対応しているかに見える。しかし民衆の「非政治性」と社会の「無思想状況」とは決して同義ではない。この点を明らかにするために、まず民衆の「非政治性」について述べよう。

「非政治的」民衆は、かつて1950年代後半から60年代前半にかけてダニエル・ベルやライト・ミルズらアメリカの社会学者によってMass＝マスすなわち「大衆」として描かれた¹。「大衆社会論」と言われるものがそれである。この大衆概念は「政治的関心」を明晰に持つ市民(Citizen)概念と対比され、それに即応して「大衆社会」は「市民社会」に対比される概念として用いられた。その場合、産業高度化によって社会が均質な(ホモジーニアス)ものに化すことによって、民衆が個性を喪失し没主体化することがマス化・大衆社会化の動因であると解釈された。デービット・リースマンの他人指向型の「孤独なる群衆」という考えも、同じ高度産業社会下の民衆理解から出たものである。

日本でこうした「大衆社会論」に50年代後半期にいち早く着目したのは松下圭一だった。マルキシストでもある松下は「独占資本主義」というマルクス主義的概念を用いて「大衆社会」を説明

した。すなわち「政治的関心」を有する「市民」が産業資本主義社会段階の民衆であるのに対して、「政治的無関心」の「マス＝大衆」は独占資本主義社会段階の民衆であると見なす。言い換えれば資本主義社会は産業の高度化を達成したのち、独占資本主義段階に発展するととらえ、そこに住む民衆こそがマス化すると考えたのである。この場合、松下にとっては、「大衆」にかわる「市民」をいかに取り戻すかが問題であった²。

アメリカ社会学の「産業高度化大衆社会論」であれ、松下の「独占資本主義大衆社会論」であれ、民衆は産業発展の段階のいかんによって「政治的関心」を持つ「市民」になったり、「政治的無関心」を特徴とする「マス＝大衆」になったりする、と主張しているわけである。

しかし民衆はこのように簡単に市民になったり大衆になったりするものだろうか？ 実際、松下圭一は、自身の「大衆社会論」を提起して間もなく、1960年の日米安保条約反対運動がもたらした民衆運動の高まりを見て、「大衆」が「市民」に成長したと考えた。それだけではない。安保条約が自然成立したのちの60年秋以後、民衆運動が鎮静化して再び、現象的に民衆の「政治的無関心」が顕著になるや、松下は今度はこれを、農村の「ムラ」状況と都市の「マス」状況が相呼応して「大衆」の「政治的無関心」を支えていると述べた。松下だけではない。同様の状況を指して小林直樹はこれを「ヘーゲルが万年植物の生態にたとえたようなアジア的停滞性」と呼んだのである。さらに前述したように清水幾太郎も1963年にこの状況をいかに克服するかを論じて、「無思想時代の思想」を発表した³。

60年代初頭のこうした「政治空白」の状況は、しかしながら60年代半ばにトンキン湾事件を契機にベトナム戦争が本格化するや、再び「政治の季節」に回帰し、一連の「大衆社会論」的な言説は一気に後退していった。

以上のような「大衆」と「市民」の間を揺れ動

くものとしてとらえられる民衆像は、果たして民衆の現実を正しくとらえたものと言えるだろうか？

ここには論者みずからについては、民衆と区別される知的政治的エリート（すなわち知識人）と自身を見なしたうえ、「政治的無関心」の中にある民衆を「政治世界」や「思想世界」に誘導する「啓蒙者」として自己を位置付ける認識が共通して働いている。だが果たして自身の存在をこのように「非政治的」「非思想的」な民衆と截然と区別し位置付けることが可能だろうか？

すべての人間は「等身大の自己」を例外なく抱えて生きている。たとえ知的政治エリート（知識人）といえども、「政治世界」「思想世界」のみによって立つことはできず、日常の生活を生きる「非政治的」「非思想的」な民衆性が必ずびり付いて存在するはずである。問題は知識人の「政治世界」「思想世界」に関する言説が、多くの場合に「等身大の自己」の世界を越えて語られ、それゆえにしばしば「等身大の世界」すなわち日々の衣食住の生活からの意識の乖離を起こしがちな点にある。つまり生活を切り捨てて思想によってのみ立つ「知識人」がそこに現れる。そこにまた知識人が上述のように自己と民衆とを区別する意識を生じさせやすい背景もあるのである。

この点で竹内好は自身を「政治世界」「思想世界」にかかわる知識人であることを自覚しつつ、しかも常に自己の内に「非政治的」「非思想的」な民衆性がつきまとうことを忘れることがなかった。

今回のシンポジウムで鶴見俊輔報告と松本健一報告は、竹内好の言説をめぐる「態度」を回想して次のように述べた。竹内には特有の寡黙さがあり、とくに竹内の友人の哲学者、埴谷雄高と好対照をなしていたという。埴谷によれば竹内は座談の席では饒舌気味の埴谷に比べて極端に口数が少なかった。しかし議論が煮詰まってきて最後の段階になると、竹内は訥々と幾つかの言葉を吐く。するとその言葉は、それまで座談で重ねてきた議

論をすべて覆してしまうような効果を持ったというのである。

鶴見と松本が回想した竹内の寡黙さとは竹内が自身の内なる民衆性、つまり日常的な「非政治世界」「非思想世界」に生きる民衆性を意識するところから発するものだと私は思う。竹内は近代日本が戦時日本に至るまでに作り上げてきた「漢学」ないし「支那学」の伝統を批判するところが大きかった。というのは竹内の目からは「漢学」や「支那学」には、現に生きて生活する人間の目をもって対象としての中国や中国人に迫るところがないと見えたからである。だからそこでは戦乱の混沌の中に日常を生きる中国人の真の姿は捉えられない。つまり「漢学」や「支那学」はしばしば、孔孟や諸子百家の学、あるいは杜甫や李白の漢詩を重んじるところがありながら、みずからと同時代を生きている中国の文化や中国人の生き様に対してはこれを蔑み軽んじる態度が抜きがたくあり、そこに竹内の批判は集中していたのである。

こうして竹内好には魯迅に倣って常に「言葉の不自由を知りつつ、一片真切の言葉を吐く」ことに努める姿勢が見られた。「非政治性」を抱えて生きる民衆は、「政治世界」に対して饒舌ではあり得ない。そのような民衆とともにみずからも傷つくことのできる生活者の地平にみずからを置く視点を持つなら、どんな人間もその言葉は「不自由」なものにならざるを得ない。それでいながら竹内好はむろん単なる生活者としての民衆にとどまることはできず、同時に「政治世界」「思想世界」に向けて言葉を発することを生業とする知識人にほかならなかった。この自己の内部のあい矛盾する二つの要素を常に意識し続けること、それが竹内の方法論だったのである。竹内の座談における「寡黙さ」もその点に由来するものだったろう。

この点にかかわって岡山麻子報告は、1937年から39年にかけて書かれた竹内の「北京日記」を取り上げて、極めて興味ある指摘をした。

竹内は北京生活最後の数カ月間、ある女性と恋

愛に陥っている。異国の地でのこの恋愛経験は、無力な「等身大の人間」として日常の「生＝性」を生きる自己、それゆえに一人の愛する女性の前で、何ら有効な言葉を紡ぎ出すことができない年若い自己、を竹内に強く意識させた。それより以前、竹内はすでに自身の「卑小」さを意識する中で、「小説を書かなくてもいいから、文学者としての矜持を失わずに生きたいと切に懇う気持ち」を持つに至っていた。恋愛経験はそうした自身の卑小さをより深く自覚させる契機となったに違いない。むろんこうした恋愛経験は他の多くの人にも起きる。問題は、竹内がその経験を、北京という自己の文学の対象となる異国空間において、「等身大」の中国の人々の現実を文学的感性をもってとらえようと決意を固める中で、その身に受けたことにある。それゆえに竹内には、この恋愛経験を自身の知識人としてのあり様と無関係なものとして方法的に切り捨てることが到底できなかったのである。

[II]

「非政治」と「政治」：水俣病の事例から

民衆の抱える「非政治性」は実際には、現象的に民衆が政治運動に立ち上がり「政治の季節」を到来させている際も、一貫して持続していると言わねばならない。言い換えれば、民衆は「非政治性」を払拭し切り捨てて、「政治性」を帯びるようになって政治運動に立ち上がるわけではない。

「非政治世界」の住民である民衆は、かつて鶴見和子が柳田国男に倣って常民と呼んだ人々を典型としている。常民は原理的に日常の生業（日々のたつき）が成立し守られている限りは、みずから「政治」に近付いたり、また「政治」を招き寄せたりすることはない。常民にとって「政治」は通例「向こうからやって来る」ものとしてあるからだ。たとえば作家石牟礼道子はその半生をかけ

て描き続けた熊本県不知火海の水俣漁民は、まさにそうした常民にほかならなかった。では常民にとっての「政治」が「向こうからやって来る」ものとしてあるとはどのようなことなのか？

水俣病が最初に確認されたのは、今からちょうど50年前の1956年のことである。水俣漁民にとって水俣病は彼らの日々の生業を破壊するものとして「向こうからやって来た」ものにほかならなかった。新日本窒素(株)水俣工場のアセトアルデヒド排水中のメチル水銀化合物による不知火海汚染によって、多くの水俣漁民はみずからが激しい苦しみを伴う水銀中毒の水俣病に襲われただけでなく、水俣湾産の魚介類の有機水銀汚染によって生業である漁業のなりわいそのものをも奪われた。

水俣漁民にとって水俣工場自体はむろんみずから望んで誘致したものではない。歴史的に見ると新日本窒素の前身である日本窒素肥料会社(以後、日窒と略)が1908年に水俣工場を設立したことに始まり、1950年に日窒が解散したあとを受け継ぐ形で新日本窒素(以後、新日窒と略)が設立された。その前後から、水俣病が発生するのである。もともと日窒の段階ですでに1932年アセトアルデヒドの生産が開始され、それ以後メチル水銀(有機水銀)の流出が生じていたが、徐々にその生産規模が拡大するにつれて1942年水俣市月の浦のちに水俣病と判明する患者が発生していた。そののち新日窒が設立されて3年を経過した1953年水俣病第一号と認定された患者の発病が起きたのである。

当初水俣病は風土病あるいは伝染病とされていたが、第一号患者の発生から3年後の1956年熊本大学医学部研究班が伝染病説を否定、病因を新日窒水俣工場からの有機水銀を含む排水と指摘し、初めて水俣病問題が政治問題化することとなった。ここで「政治問題化」と言うのは、まず何よりも不知火海を漁場とする水俣漁民が自身の日々の生活の破壊に抵抗するために社会的政治的に立ち上がったという事実を指している。具体的